

受験番号

--	--	--	--	--

社会科学

問題冊子

指 示

合図があるまでは絶対に中を開けないこと

1. この試験は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができるかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に40の問題（1-40）があります。配点は80点満点です。
解答カードには表裏あわせて100の解答欄がありますが、41以降は使用しないでください。
3. 解答のための時間は、正味70分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて70分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります。答えの記入のしかたが指示どおりでないと、正解でも無効になります。
5. 答えはすべて、解答カードの定められたわくの中に鉛筆を用いて書いてください。
それ以外のところに書いたり、また答え以外のものを書きこんだりすると無効になります。
6. 一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを定められたとおりに、はっきり書いてください。
7. メモにはこの問題冊子の余白を用い、ほかの紙は使用しないでください。
8. 「解答やめ」の合図があったら、ただちにやめてください。試験監督が問題冊子と解答カードを集め終わるまでは、退室できません。
9. この指示について質問があるときは、試験監督に聞いてください。ただし問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答カードの定められたところに忘れずに書き入れること

(A)

はじめに

17 世紀の中頃、ヨーロッパの一都市に好奇心に満ちた少年がいた。少年は、16 歳で故郷を離れ、異郷をめぐって勉学を重ね、長じて遠く日本まで旅をした。少年の名は、エンゲルベルト・ケンペル。彼は、1651 年に北ドイツの一都市レムゴにプロテスタントの牧師の息子として生まれた。ドイツの地を疲弊させた三〇年戦争が終わって 3 年後のことである。ケンペルは、オランダ東インド会社の医師として長崎出島に 2 年間滞在し、将軍徳川綱吉との謁見の旅に出、元禄時代の日本に関する大部の記録を残した。現在、研究者の間では江戸幕府の「鎖国」政策について、あるいは「世界から遮断された江戸時代」像に対して再評価が進んでいるが、それでも江戸時代の日本が、対外交渉の相手と場を厳しく制限し、情報の流出を禁じた社会であったことは間違いない。日本関連の情報が極端に少ない、あるいはステレオ・タイプ化した状況にあって、ケンペルが残した豊かな記録は、18、19 世紀のヨーロッパ人の日本認識の形成に決定的な役割を果たした。ヴォルテール、レッシング、モンテスキュー、カントらがケンペルの読者であったといえ、その影響力の大きさがうかがえるであろう。

ケンペルの著作で生前に公刊されたのは、『廻国奇観』（1712 年刊）のみである。ラテン語で書かれたこの書物には、後に「鎖国論」と訳される論考など日本に関する論文が幾つか含まれていた。しかし、さらに多くの読者を獲得して彼の文名を高めたのは、死後に英語（1727 年刊）で、さらにドイツ語（1777-79 年刊）で出版された『日本誌』である。ドイツ語版の巻末には、『廻国奇観』に発表された日本関係の論文も収録された。ケンペル没後に『日本誌』が刊行されるまでの経緯はそれ自体大変興味深いのだが、ここで重要なのはこの大著の内容である。日本の地理、自然、歴史、宗教、風俗、対日貿易、江戸参府記録などきわめて多岐に及び、その記述の具体性と総合性において当時の日本像を一新するものであったといわれている。「鎖国論」の原題である「もっともな理由のある日本の鎖国」が端的に示すように、ケンペルの日本研究の特質は、個々の事象を日本社会の文脈において理解しようとする点にあった。ヨーロッパの制度や宗教のみを絶対視することなく、比較の観点から、また当該社会の置かれた状況から江戸期の日本を記述した点において、この書は高い評価を得てきたのである。ではケンペルは、自らの文化を相対化するこうした眼差しをどのようにして獲得しえたのであろうか。彼の受けた教育、長い旅の道のり、そして異国の協力者との関係から考えてみよう。

1. ケンペルの受けた教育

ケンペルはケーニヒスベルク大学の医学部で学び、オランダ東インド会社の外科医として日

本にやってきた。しかし、彼がライデン大学に学位論文を提出して医学博士となったのは、日本から帰国した直後の 1694 年のことであり、彼はすでに 43 歳になっていた。ケンペルがその前半生に受けた教育とキャリアは、私たちの思い描く医師のそれとは大きく異なっている。

ケンペルの生まれたレムゴは、神聖ローマ帝国内の小領邦リッペ伯領にある。かつてはハンザ都市として栄えた都市であるが、近世史のなかのレムゴは魔女狩りの火が燃えさかった都市として有名である。1 年間に 37 名が刑に処せられた年もあったという。少年ケンペルの暮らしも、熱病のように広がる魔女狩りと無縁ではいられなかった。彼の義理の叔父にアンドレアス・コッホという人物がいた。父と同じ教会の次席牧師であった。彼は、町を覆う魔女狩り熱に警告を発し、魔女を裁く側の資質を問い、逆に拷問の末に悪魔の手先として処刑されてしまった。魔女裁判では、拷問による自白が容認されていたのである。1666 年、ケンペルが 14 歳の時のことである。翌 1667 年には、彼のもうひとりの義理の叔父、ベルンハルト・グラッベも、コッホとの共謀容疑で処刑されてしまう。魔女の処刑は火刑と定められていたが、家族の支払った償い金と引き換えに、リッペ伯は彼らを斬首に減刑するという「恩赦」を与えた。

この年、ケンペルはレムゴのラテン語学校を去り、ハーメルンの学校に移る。この転校に叔父たちの悲劇が直接影響したかどうかは定かではない。故郷を離れて研鑽を積むことは、この時代にはそれほど特別なことではなかった。しかし、ケンペル研究者 B・M・ボダルト＝ベイリーは、『廻国奇観』の中で魔女狩りを糾弾した箇所のあることを論拠に、ケンペルが魔女狩りに対して生涯深い憤怒を抱いていた、と主張している。傾聴に値する見解であろう。少なくとも 16 歳でレムゴを離れたケンペルが一時的にせよ故郷に戻った記録は、1680 年までない。故郷と家族を襲った不幸は、自らを育んだ世界に対する深い問いを少年の心に刻んだのではなかったろうか。

ケンペルはハーメルンにも長くとはどまらず、リューネブルク、リューベックと高等学校（ギムナジウム）を移り、最後は 1673 年にグダニスク（ダンツィヒ）の学校で修了論文を書いている。歴史に翻弄されたこの都市は、ロシア、プロイセン、ドイツによる占領を経験し、近年ではポーランド民主化運動の拠点となるのであるが、この時期にはポーランド王国の庇護のもとで経済的にも文化的にも活況を呈していた。時にケンペルは 22 歳になっていた。この間、彼は文献学、古典、歴史、地理、哲学を学んだとされる。高等学校の教育は、現在の大学教育に、あるいはそれ以上に匹敵すると考えてよいであろう。ラテン語で書かれたケンペルの修了論文のテーマは、「二重の主権について」である。支配者と臣民の間で主権を分割することが可能か否かを問う内容であった。主権は、政治社会の在りようが転換しつつある近世ヨーロッパにおいて、法学者を中心に多くの識者の関心を集めたテーマであり、ケンペルはここで主権の分割に反対する議論を展開している。ちなみに、当時の習わしに則り出版されたケンペルの修了論文には、市長が祝詞を寄せている。そこには、ケンペルならば暴力に対して軍神マルスの武器

ではなく、女神ミネルヴァの穏やかな武器で闘うであろう、とある。

口頭試験を通して大学への入学資格を得たケンペルのこの後の足跡は、彼が携えていたサイン帳によって詳細に辿ることができる。当時は、行く先々の師や貴顕の士からサインをもらう習慣があったのである。それによればケンペルは、トルンを経て、クラクフ大学で医学、哲学を学び修士の学位を得た。次いで彼はケーニヒスベルクに移る。現在のロシア領カリーニングラードである。1677年以降は、ケーニヒスベルク大学で博物学と医学を学んでいるが、博士号を取得しないまま、1681年にはウプサラからさらにストックホルムへと向かう。おそらく職を求めてのことであろう。実際、彼はスウェーデン国王の使節団書記官という職を得て、人生の新たなステージに入る。故郷を離れて、15年が過ぎていた。

彼の受けた教育をこのように概観してみると、幾つかの点に気づかされる。第一に、遍歴といえるほどの移動の多さである。ヨーロッパ中世にあっては、学生が師を求めて遍歴をすることは、むしろ通常の事態であった。中世以来ケンペルの時代まで、ヨーロッパの知的世界はラテン語という共通言語をもち、汎ヨーロッパ的な交流が可能であった。リスボンからクラクフまでラテン語で手紙のやりとりができる「文人共和国」が広がっていたのである。大学が世俗権力との関係を深めて制度が整うにつれ、教師も学生もかつてのように移動することは少なくなっていた。その中でケンペルが幾つもの地を巡ったのは、彼の並外れた向学心の故か、あるいは生来の旅好きのせいかな、定かではない。しかし、サイン帳が教えるように、多くの師や友との交わりが、彼の知的世界を豊かに広げたことは間違いないであろう。

第二に、彼が移動した空間についてである。これまで言及した地名は、現在ではドイツ、ポーランド、ロシア、スウェーデンといくつもの国家にまたがっている。しかし、フランス革命とナポレオンの衝撃のもとで国民国家が形成される前のケンペルの時代において、国境線で画された空間への一元的支配は貫徹しておらず、国際的秩序の在りようも現在とは異なる。そもそもドイツという国家はいまだなく、多元的な権力構造をもつ神聖ローマ帝国の時代であった。それゆえに、人びとの国家への帰属意識は弱く、また人びとの移動に対する管理も緩やかであった。とはいえ、ケンペルの学んだ地域を見ると、ひとつの特徴がみてとれる。それは、プロテスタント地域、しかもルター派の強い地域であったことである。例外はクラクフであるが、この大学はルーヴアンと並んでプロテスタントをも受け入れることで知られていた。17世紀後半のヨーロッパは、いまだ宗派間の差異が大きな意味を持つ世界であった。

第三に、彼の学んだ学問の幅の広さである。ラテン語に始まった彼の学問は、医学のみならず広範な領域に及んでいる。彼のサイン帳は、ケンペルの博学ぶりが同時代の人びとの敬意を集めたことを教えている。しかし、ケンペルの能力が傑出していても、ヨーロッパの伝統からすれば、広範な知を習得したのはケンペルに限るわけではない。そもそも中世の大学では、神学、法学、医学などの専門教育を始めるまえに、自由学芸（リベラル・アーツ）と称される

7学科を修得することが義務づけられていた。現在の区分でいえば、文系、理系の双方にまたがる文法学、論理学、修辞学、音楽、算術、幾何学、天文学の7学科がこれにあたる。哲学はこれらを統べる知として重視されていた。さらにルネサンスのうねりと大航海時代の到来は、ヨーロッパ人の知的関心の幅を格段に広げた。その意味では、ケンペルは時代の子であった。狭い職業教育に特化されていないケンペルの広い教養は、彼が未知の世界を多角的に観察することを可能にしたことであろう。

2. ケンペルの旅

ケンペルがスウェーデンで得た仕事は、国王派遣使節団の書記官であった。目的地は、ペルシアの都イスファハーン。1683年の春にストックホルムを出てペルシアに向かったケンペルは、1693年までヨーロッパに戻ることはなかった。日本が彼の最後の目的地となる。ケンペルが長崎の出島に到着したのは、1690年9月。長崎を発ってオランダへの帰途についたのは、1692年10月末日のことである。10年に及ぶ旅の日々は、熱心な学徒であったケンペルに何をもたらしたのであろうか。まずはその足跡を追ってみたい。

ケンペルが向かった頃のスウェーデンは、バルト帝国と呼びうるほどの強国であった。時の国王はカール11世である。父のカール10世は、神聖ローマ帝国内のプファルツ家の出であり、宮廷ではドイツ語が多用されていた。しかもスウェーデン王の支配領域は、現在のフィンランドやエストニアに加えて、ブレーメン・フェルデン領やボンメルンなど神聖ローマ帝国内にも及んでいた。それゆえ、ドイツ語を母語とするケンペルがスウェーデン王の使節団に加わったことは、それほど奇異なことではない。そもそも使節団の団長は、オランダ人ルドヴィグ・ファブリティウスであった。スウェーデンがペルシアに使節団を送った目的として、二つ指摘されている。ひとつはペルシアとの通商であり、ふたつにヨーロッパを脅かす(B)への牽制である。他方、新しい知識を渴望し学問的野心に燃えるケンペルにとっては、この旅は調査研究を行う得難い機会となった。ケンペルはストックホルムを出発した当初から、日々、詳細な記録を残している。当時はスウェーデンの支配下にあったニエン(後のサンクトペテルブルク)を経て国境の町ノヴゴロドからロシアに入った一行は、モスクワの豪華な宮廷で皇帝に謁見し、ドイツ語でしたためられたスウェーデン国王からの親書を届けている。

2ヶ月のモスクワ滞在の後、一行は、河川を下ってカスピ海沿岸のアストラハンに着く。ここからカスピ海を航行し、さらに隊商たちの道をたどって陸路ペルシアの都イスファハーンに向かった。彼らがイスファハーンに入ることができたのは、ストックホルムを発って1年後、1684年の春である。ペルシア皇帝との謁見には、さらに4ヶ月の待機が必要となった。しかし、ケンペルにとっては、すべてが貴重な調査研究の時間となった。カプチン会の修道士からトル

コ語を学ぶこともできた。厳しい旅の途上でも、ケンペルは各地の自然や風俗、宗教典礼などを詳細に記述していた。測定器や歩幅による計測に習熟し、地図やスケッチを描く技術も向上している。ナフサと呼ばれる燃える水が吹き出すカスピ海沿岸の地バクーをヨーロッパ人として初めて記述したのは、ケンペルである。命がけの探検行の成果であった。彼がペルシアでおこなった研究は、後に博士論文と『廻国奇観』の相当部分を占めることになる。旅は十分に実り多いものであったはずである。スウェーデン王の使節団は、フランス王、ロシア皇帝、ポーランド王、神聖ローマ帝国皇帝らの使節とともにペルシアの王に謁見し、無事に任務を果たした。その様子をケンペルが子細に観察、記録したことはいうまでもない。しかし、公務を終えた彼は、栄達の約束されていたスウェーデンに帰ろうとはしなかった。彼の目はもっと遠くへ、いまだ知らぬ世界へと注がれていた。彼はインドへ、さらに中国に行くことを願っていた。そのために彼が目を付けたのが、オランダ東インド会社である。熱心な働きかけが功を奏して、1684年の暮れにケンペルはオランダ東インド会社の上級外科医として仮採用された。彼の新しいキャリアの始まりである。

翌1685年の11月、ケンペルはイスファハーンを離れてオランダ東インド会社の一行とともにホルムズ湾岸のバンダル・アッパースに向かう。この旅の途中、ケンペルは本隊から離れてアレクサンドロス大王に破壊されたペルセポリスを訪ねている。わずか3日間という短い期間であったが、彼が残したスケッチやくさび形文字の写しは、その後の発掘調査の礎となる。しかし、期待を胸に到着したバンダル・アッパースの気候は過酷で、彼は地獄のような場所と形容している。健康を損ないながらも、彼はナツメヤシの研究などの貴重な成果を挙げている。2年半の辛い滞在を終えてケンペルがインドに向かったのは、1688年6月である。しかし、長年夢見たインドであったが、ケンペルは沿岸地方とスリランカを見ることができただけであり、その知的関心が十分に満たされることはなかった。

ケンペルが次に向かったのは、ジャワのバタヴィア（ジャカルタ）である。バタヴィアは、およそ2万人のヨーロッパ人が住むオランダ東インド会社の本拠地であった。しかし、医師として望んだポストは与えられず、この地でもケンペルは不遇であった。彼に救いの手を差し伸べたのが、3度にわたって日本商館長を務めた経験をもつオランダ東インド会社総督ヨハネス・カンプハイスである。カンプハイスの勧めに応じて、ケンペルは日本行きを決心する。彼は、カンプハイスが長年集めた日本関連の資料を託され、また東インド会社に集積された情報を丁寧に読んで準備をすすめることができた。1690年5月、ケンペルを乗せた船は、シャム王国の都アユタヤを経て、激しい嵐に見舞われながらも9月、長崎に到着する。

こうして日本までの足跡を追ってみると、書斎の人であったケンペルが逞しいフィールドの人となっていくプロセスがよくわかる。彼の旅は、初めから日本を目指したものではない。さまざまな偶然の産物であったとさえいえる。しかし、彼が『日本誌』を書き得たのは、この長

い旅があったからこそであろう。彼は、計測技術やスケッチなどフィールド調査に必要なさまざまな技能を旅の中で磨いた。なによりも、旅は彼に比較の視点を与えた。たとえば『日本誌』の中に、長崎の法華宗の寺を記述する次のような一節がある。「寺の住職はわれわれの訪問を非常に喜んで迎え、われわれやわれわれの持物を一々珍しがり、またわれわれに懇切に心置きなく各部屋の隅々まで見せた。この寺の付属の堂に懸けた旗や幟は、ローマ・カトリック教徒が行列に用うる旗幟と同じように、歓喜と法悦を表わす標識であり、珍しい絹地で作っており、シャムの寺院の前に懸けてあるカエマン（Cajeman）の垂幕に似ている。」人は未知のものに出会ったとき、既知のものと比較し、類推することでこれを理解し、説明しようとする。長い旅を経験し、多様な文化や社会を観察してきたケンペルの場合、比較の軸はひとつではない。さまざまな比喩を用いる彼がいくつも参照軸を持っていたことは、この短い文章からもわかってしまう。こうした意識的、無意識的な知的営為のなかで、ケンペルは自らを育んだ文化を相対化していたものと思われる。

3. (C)

ケンペルの日本滞在は1690年9月から1692年10月末までの2年1ヶ月である。この間、ケンペルは江戸にのぼり、5代将軍綱吉に2度拝謁する機会を得た。ケンペルは綱吉について、「氣宇雄大にして天性勝れ、父方の才徳を一身に享け、国法を厳守し、臣下には極めて寛大である。かれは幼少にして孔子の教えによって薫陶を受け、將軍となつてからは、その国民と国柄に適合する政治を行なっている」と評価する。若きケンペルが、主権の分割に反対していたことを想起したい。また、次の一節にみるように、ケンペルにとっては旅の途中見聞きする日本の状況は、驚きにみちたものであった。「この国の大街道は、毎日信じられぬほど大勢の人々が往来し、季節時には、ヨーロッパの人口の多い町の通りよりも多くの人々で埋められる。」これらすべての経験が、大著『日本誌』に結実する。しかし、考えてみよう。出島のケンペルらは、普段は日本人との接触を禁じられ、厳しい監視下に置かれていた。ケンペルは次のように語る。「日本では(D)教徒が殲滅されて以来、わずかに入国を許されているわれわれオランダの商人もシナの商人も、いわば軟禁状態におかれ、日本人との交流や共同生活の途は断ち切られており、完全な鎖国状態におかれている。この時以来日本人も亦、この軟禁同様の状態におかれているわれわれ外客に対して、気も許さず、口もきかなくなりました。なお、特にわれわれと職務上接触する人びとはすべて、祖国の事柄や宗教事情、秘密の国事、その他かれらに与えられた指示事項等については、絶対にわれわれに知らせず、明かさぬことを誓詞と血判によって義務付けられているのである。」

こうした状況の中で残された『日本誌』は、彼個人の観察記録にとどまらず、日本の地理、

歴史、思想、宗教、統治制度などについての詳細かつ抽象的な内容を含んでいる。江戸後期、オランダ語版の『日本誌』を入手した日本の人びとが、感嘆を通り越して怖れを抱いたほどである。オランダ東インド会社に蓄積された知識を我が物としていたとはいえ、厳しい制限のもとでケンペルは何故にこれほどの研究をなしたのだろうか。この問いに対する答えを、ケンペル自ら『日本誌』の序文で明かしている。「私が非常に学識のある一青年と知り合い、私の目的を達成し、日本の事物を記述する上にすこぶる豊富な収穫を齎^{もたら}しうる適材を得たことは、全く僥倖であった。この青年は、24歳前後の知識欲に燃えた学生であり、日本やシナの文籍に通じ、私が出島入りをした直後、私から薬物学を学ぶために従僕として与えられたのであった。」2度の江戸参府にも同行したこの青年こそ、ケンペルの日本研究の鍵を握る協力者であった。彼はケンペルの求めに応じて、書籍や文書、地図を手に入れ、彼に翻訳して説明したのである。

禁令を犯してケンペルに協力したこの青年とは何者か。ケンペル自身は、青年に累がおよぶことを案じてか、その名前を残していない。長い間謎とされたこの人物の名前が、近年、大英博物館所蔵のケンペル・コレクションから発見された一枚の請状によって明らかとなった。青年の名前は、今村源右衛門英生という。出島の通詞の息子として生まれた英生は、おそらく子供の頃からオランダ語に親しんでいた。ケンペルは、この青年に体系的にオランダ語文法を教える。「幸いにかれは早くもその年の終わりには、オランダ語で文章をいちおう書き、日本の通詞といわれる連中が足許にも及ばぬほどよく話せるようになった」という。それまで、日本の通詞のレベルは低く、ケンペルの言葉を借りれば「この通詞なるものが、概ねすこぶるお粗末な代物であり、辛うじて外国語の単語をでたらめに繋ぎ合わせ、しかもお国訛りで自己流に発音し得る語学力しかなく、大抵何を言おうとしているのかさっぱり判らず、通詞と話をするのにもう1人別の通詞を必要とする有様である。」しかし、ケンペルの教育によって英生のオランダ語力は飛躍的に進歩し、古今の文献を翻訳して彼に説明することが可能となったのである。ケンペルがラテン語にはじまり、行く先々で異国の言語を習得した経験は、体系的に言語を教える上で有益であったことであろう。

翻訳作業といえば、よく縦のものを横にする、といわれる。しかし、ことはそれほど簡単ではない。二つの言語に、それぞれ相応する具体的対象物がある場合は比較的容易であろう。しかし、抽象的な事象の場合はどうであろう。ケンペルが日本にいた時から170年後、幕府の文久遣欧使節団の一行としてヨーロッパに行った福沢諭吉は、日本に存在しないヨーロッパの政党政治や議会制度、徴兵制といった社会・法制度を理解する困難さについて、次のような文章を残している。「また党派には保守党と自由党と徒党のようなものがあって、双方負けず劣らず鎗^{しん}を削って争うているという。何の事だ、太平無事の天下に政治上の喧嘩^{けんか}をしているという。サア分らない。コリヤ大変なことだ、何をしているのか知らん。少しも考えのつこうはずがない。あの人とこの人とは敵だなんというて、同じテーブルで酒を飲んで飯を喰っている。少しも分

らない。ソレがほぼ分るようになろうというまでには骨の折れた話で、そのいわれ因縁が少しづつ分るようになって来て、入り組んだ事柄になると5日も10日もかかってヤット胸に落ちるというようなわけで、ソレが今度洋行の利益でした。」適塾の塾頭をつとめ、江戸でいち早く英語を学び、咸臨丸でアメリカも訪ねた福沢にして、こうである。一つ一つの概念を突き詰め、理解することなくして、訳語一つ定めることはできない。翻訳とは、異なる言語、異なる文化を媒介する実に「骨の折れた話」なのである。日本の法や歴史、社会制度という抽象的事象をケンペルが理解しえたのは、聡明な英生との粘り強い共同作業の賜であったといえるであろう。もちろん、ケンペルを通して未知の世界を学ぼうという英生の側の真摯な努力と人間的な深い信頼関係なくして、このような危険な共同作業が行われたとは考えられない。「とくに日本人が外国の歴史、制度、芸術、学問などについて何かを見聞きしようとする意欲は格別である」という言葉は、ケンペルの個人的経験から生まれたものであった。出島のケンペルの屋敷で、あるいは江戸への旅の行き帰りに、2人が交わしたであろう長い緊密な議論の時間は、ケンペルが日本を深く知り、自らの文化を相対化していくための時間であったといえるであろう。

他方、この時間は、若い英生にも多くの変化をもたらしたはずである。もちろん、英生自身の言葉でこの経験が語られることはなかった。しかし、ケンペルが帰国して3年ほどして、英生が稽古通詞の任用試験を受けたときのことを、オランダ商館日誌は次のように記録している。「此もの（今村源右衛門）は蘭語に能く熟達して、総ての通詞中一人として彼の上を越すものは無いと称して可なるべく、尤も彼は幼年時代から此処の上席外科医の下に於て出納役に使用されて今日に及んだものである。」英生は、これ以後、有能な通詞として破格の出世をし、長崎の通詞たちのオランダ語レベルを大きく引き上げる。

ケンペルが日本を離れて16年後の1708年、宣教師ジョヴァンニ・シドッティが日本布教を図り、捕らえられるという事件がおこった。幕府中枢にいたひとりの儒者は、江戸に移送されたシドッティを尋問して『西洋紀聞』を書くのであるが、この時の通詞が英生である。英生は、オランダ人からラテン語の特訓をうけ、シドッティと儒者の対話を媒介したのである。彼らの間のきわめて高度な対話は、ケンペルを通じてヨーロッパ文化に親しんだ英生という媒介者がなければ成立しなかったことであろう。

おわりに

ヨーロッパに帰ったケンペルは、故郷レムゴの近くに居を定める。彼が没する1年前の1715年、レムゴ市当局はついに魔女狩りの誤りを公に認め、資料の焼却を決めている。彼の晩年は、志に反して十分な執筆の時間に恵まれず、生前に『日本誌』を出版することはかなわなかった。しかし、彼が遺した原稿がイギリスに渡り、広くヨーロッパの人々に読まれるに至ったことは、

冒頭で述べた通りである。現在の私たちの目から見ると、そこには不正確な記述もあれば、誤解や過大評価もある。しかし、日本社会の事情に即して諸制度や習俗の意味を捉えようとしたケンペルの眼差しが、『日本誌』を通して、当時のヨーロッパ人の日本認識を、ひいては世界認識を揺るがせた意味は大きい。魔女狩りへの対応に見られるように、ケンペルの生涯は、人々の感じ方や考え方が大きく変わり、啓蒙と呼ばれる新たな思潮が生まれつつあった転換期にあたる。転換期とは混沌とした時代でもある。混沌たる時代に翻弄され、また時代に挑んだケンペルの歩みは、この書物を通して、さらに大きな社会的、知的変動を引き起こしていったのである。

翻って私たちの回りを見てみよう。現代の私たちの回りには、映画やテレビ、あるいはインターネットを通して、世界の多様な地域の映像や情報があふれている。行ったことのない地域の映像を見ても、どこか「見慣れた風景」と感じるほどである。また、あふれる情報は必ずしも、他者を理解し、自らを相対化する契機となるわけではない。差異の認識が、むしろ偏見や狭隘な自己満足に繋がる場合が少なからずあるからである。魔女狩りの時代から遠く隔たったとはいえ、人が自らを疑い、生まれ育った文化を相対化する眼差しを獲得するのは、決して容易なことではない。それ故にこそ、自らの育った世界を飛び出し、広く学び、遠く旅をし、深く人と交わったケンペルの歩みから私たちが学ぶべきことは、今も少なくない。

参考文献

今村明恒『蘭学の祖今村英生』朝日新聞社出版局、1942年。

片桐一男『阿蘭陀通詞今村源右衛門英生』丸善、1995年。

ヨーゼフ・クライナー編『ケンペルのみた日本』NHK ブックス、1996年。

エンゲルベルト・ケンペル（今井正編訳）『改訂・増補 日本誌—日本の歴史と紀行—』霞ヶ関出版、2001年。

ピーター・パーク（原聖訳）『近世ヨーロッパの言語と社会』岩波書店、2009年。

福沢諭吉『福翁自伝』講談社、2010年。

B・M・ボダルト＝ベイリー（中直一訳）『ケンペルと徳川綱吉』中央公論社、1994年。

B・M・ボダルト＝ベイリー、デレク・マサレラ編（中直一、小林早百合訳）『遙かなる目的地』大阪大学出版会、1999年。

B・M・ボダルト＝ベイリー（中直一訳）『ケンペル』ミネルヴァ書房、2009年。

永積昭『オランダ東インド会社』講談社、2000年。

松井洋子『ケンペルとシーボルト』山川出版社、2010年。

歴史学研究会編『世界史史料集』岩波書店、2007-2011年。

次の問題（1－40）には、それぞれ a, b, c, d の答えが与えてあります。
各問題につき、a, b, c, d のなかから、最も適当と思う答えを一つだけ選び、
解答カードの相当欄にあたる a, b, c, d のいずれかのわくのなかを黒くぬ
って、あなたの答えを示しなさい。

例 

   

-
1. 資料のエッセイ（A）に題名をつけるとすると、次のうちどれがもっとも適切か。
 - a. 異文化を媒介する人
 - b. 旅行の効用
 - c. 世界史のなかの出島
 - d. 異文化理解における翻訳の問題
 2. 資料4頁の（B）に入る国名を次のどれか。
 - a. 清
 - b. ムガル帝国
 - c. オスマン・トルコ
 - d. ビザンチン帝国
 3. 資料6頁（C）に入る題は、次のうちどれが適切か。
 - a. 福沢諭吉の政治理解
 - b. オランダ語習得の難しさ
 - c. ケンペルの協力者
 - d. 禁令と真理
 4. 資料6頁の（D）に入る語句は次のどれか。
 - a. ルター派
 - b. ローマ・カトリック
 - c. カルヴァン派
 - d. アングリカン

5. 冒頭にある「世界から遮断された江戸時代」像を修正する論拠となるのはどの事項か。
- a. 禁教令
 - b. 日本町
 - c. 踏み絵
 - d. 朝鮮通信使
6. ヴォルテールとモンテスキューについて適切でない記述はどれか。
- a. ヴォルテールは、『リヴァイアサン』を著した。
 - b. モンテスキューは、『法の精神』を著した。
 - c. ヴォルテールは、『哲学書簡』を著した。
 - d. モンテスキューは、『ペルシア人の手紙』を著した。
7. ケンペルの一族が犠牲となった魔女狩りの説明として不適切なものはどれか。
- a. 魔女狩りは、拷問による自白が証拠として認められ、被害が拡大した。
 - b. 魔女狩りは、啓蒙思想の広がりとともに終焉した。
 - c. 魔女狩りは、処刑に際して火刑を用いることが常であった。
 - d. 魔女狩りは、もっぱら女性をターゲットとし、中世の暗黒面を示している。
8. 三〇年戦争の帰結として、不適切な説明は次のうちどれか。
- a. ヨーロッパ諸国が宗派の違いを軸にふたつの陣営にわかれた。
 - b. 神聖ローマ帝国内の諸領邦に、これまで以上に強い自立性が認められた。
 - c. ウェストファリア条約でオランダの独立が正式に認められた。
 - d. ヨーロッパの覇権がハプスブルク・スペインからフランスに移った。
9. 「軍神マルスの武器」と対置される「女神ミネルヴァの穏やかな武器」とは、ここでは何の喩えか。
- a. 美
 - b. 学芸
 - c. 芸能
 - d. 外交

10. 資料にある「文人共和国」の説明として適切なものはどれか。
- a. ラテン語を媒介とする知識人の交流圏
 - b. ハプスブルク帝国の中に作られた新しい国家
 - c. ラテン語を国語と定めた共和国
 - d. イベリア半島にある学者の交流圏
11. 資料から判断して、クラクフの支配的宗派は何か。
- a. ルター派
 - b. カルヴァン派
 - c. アングリカン
 - d. ローマ・カトリック
12. 資料ではケンペルの時代にヨーロッパの政治社会が転換期にあったとされている。適切な具体的事例は次のどれか。
- a. 国民主権原則の確立
 - b. 君主主権論の形成
 - c. 人権思想の成熟
 - d. 選挙権の拡充
13. 19世紀に神聖ローマ帝国が国民国家に再編されるプロセスと無関係な事項はどれか。
- a. 第三帝国
 - b. ナポレオン
 - c. ドイツ語
 - d. 普仏戦争
14. グダニスクが拠点となったポーランドの民主化運動について、不適切な説明はどれか。
- a. グダニスク造船所の労働者が結成した自主管理労働組合の名を「連帯」という。
 - b. 「連帯」を率いていたワレサが、民主化後の直接選挙で大統領となった。
 - c. ポーランドの民主化運動は、カトリック教会によって支持を受けていた。
 - d. ポーランドの民主化運動は、ソ連によって流血の弾圧を受けた。

15. ケンペルが幅広く学問をおさめた理由として、資料中で著者が挙げていない事項はどれか。
- a. ヨーロッパ人にとっての未知の世界の拡大
 - b. 好奇心の強さという個人的資質
 - c. ヨーロッパの学問的伝統
 - d. 学問による社会的栄達
16. 資料から判断して、スウェーデン国王の使節団にケンペルが職を得ることのできた理由として不適切な説明は次のうちどれか。
- a. スウェーデンがケンペルと同じプロテスタントの国であったから。
 - b. スウェーデンが神聖ローマ帝国の属国であったから。
 - c. この時期のヨーロッパでは、国籍が国家への忠誠心を図る尺度ではなかったから。
 - d. スウェーデンでケンペルの母語であるドイツ語が一種の公用語となっていたから。
17. オランダ東インド会社の要請で以下のような議論を展開したのは次のうち誰か。
- 「……空気は二つの理由で万人共有のものである。第一に、それは占拠したり所有したりすることが許されないからであり、他方、それは人々に共通に奉仕すべきものだからである。同じ理由で、海洋もまた万人共有のものである。……海洋は取引の対象とはなりえない、つまりなんびとによっても所有されえないものの一つである。したがって、海洋のいかなる部分も、ある特定の民族の所有物とはみなしえないのである。」
- a. グロティウス
 - b. マキャベリ
 - c. スピノザ
 - d. ボダン
18. パクーは 19 世紀に入り、本格的に油井が掘削されるようになったが、とりわけ多大な経済的利益をここで挙げたのが、「ノーベル兄弟石油会社」であり、その経営者の一人がアルフレッド・ノーベルであった。ノーベル賞について適切でない記述は次のどれか。
- a. イギリスの政治家ウィンストン・チャーチルは、ノーベル文学賞を望んだが、結局ノーベル平和賞を受賞した。
 - b. 国連事務総長であったダグ・ハマーショルドは、現職中に事故死したが、死後にノーベル平和賞を受賞した。
 - c. 非暴力主義で知られるマハトマ・ガンディーは、ノーベル平和賞を受賞していない。
 - d. ノーベル経済学賞をアジア人として初めて受賞したのは、アマルティア・センである。

19. 資料で言及された地名と現在の国名について、間違った組み合わせはどれか。

- a. モスクワ : ロシア :: グダニスク : ポーランド
- b. スtockホルム : スウェーデン :: バタヴィア : インドネシア
- c. ケーニヒスベルク : ロシア :: イスファハーン : イラン
- d. ニエン : スウェーデン :: 長崎 : 日本

20. 以下の文章は、ケンペルが訪れたある都市に関する同時代人の証言である。次のどの都市に関する史料か。

「この大都会には、キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラーム教徒、異教徒、拝火教徒といったあらゆる宗教を信仰する住民がいる。またここには、世界中から来た貿易商が集まっている。ここはまた、全東方世界で最も学問の栄えている町であり、ここから東方世界全体に、とりわけインドに学問が広がって行く。」

- a. イスファハーン
- b. クラクフ
- c. アユタヤ
- d. バタヴィア

21. 資料中のケンペルの綱吉評価と関係の深い説明はどれか。

- a. 動物の殺生を禁じた生類憐れみの令を出し、犬公方として多くの人々を困らせた。
- b. 湯島聖堂を建てるなど学問を重んじ、文治政治によって社会秩序を守ろうとした。
- c. 参勤交代を制度化し、国内の交通網を整備し、江戸の発展をもたらした。
- d. 禁教令を出して、キリスト教徒に対して峻厳な対応を貫いた。

22. 長崎出島に関する記述として適切でないのはどれか。

- a. 長崎は、肥前大村氏領であったが、大村氏がイエズス会に寄進したため、秀吉がこれを没収して直轄とし、それが江戸幕府にも受け継がれた。
- b. オランダ商館は、まず平戸に作られ、そののち長崎出島に移された。
- c. オランダ船が入港するたびに、オランダ商館長から幕府にオランダ風説書が提出され、海外の状況についての重要な情報源となった。
- d. 1688年、長崎出島をオランダ人の専用とするため、唐人屋敷が平戸に作られた。

23. 資料から判断して、以下の日本論の中でケンペルの見解にもっとも近いのはどれか。

- a. 「その国の位置と国柄によって外敵の襲撃に対して守りを固め、難攻不落の備えをなすような国でも、敵をも友をも共に閉め出す鎖国政策をとることは、そうすることによって他国と提携する共同社会を作るよりもさらに幸福な満ち足りた生活を営むことができない限り、徒勞に終わる。ところが日本人は、支配者によって鎖国令が布かれて以来、それを行い得ることを実証し、われわれもまた、この国の利益をとくに考えてみると、誰でも成程と容易に頷ける節があるのである。」
- b. 「この島には、他のインドのものほど上質ではないが、銀が豊富にある。また、コメ、肉に大変恵まれ、あちこちにはコムギもある。幾つかの果物、牧草、日常食べる他のものもあるけれど、他の近くの島々ほど食料がよく提供も補給もされていない。地質が悪いせいではなく（なぜなら土壌はよくて肥沃なのだから）、農業よりも戦争に熱中して、播種や耕作をかえりみない土着民の怠慢のせいである。」
- c. 「王国は多くの強大な貿易都市があることで有名である。中でも、皇帝〔将軍〕の江戸、京都、堺、大阪、岡崎、長崎が最も大きい。しかし、これらの都市は、他の都市と同様に、城壁で守られてはいない。とはいえ、この世界中で有名な日本には荘重な城や強い要塞がある。」
- d. 「だがもし文明という言葉が次のことを意味するならば、すなわち心の最も高邁な憧憬と知性の最も高貴な理解力をかきたてるために、また迷信を打破し、寛容の精神を植えつけるために、宗教——キリスト教徒が理解しているような意味での宗教の中にある最も重要なことを広め、定着させることを意味するならば、確かに、日本国民は少しも文明化されていないと言わざるを得ない。」

24. 以下に示すのは、1649年のオランダ東インド会社の各地商館の純益である。この表から導き出せない説明は次のどれか。

	グルデン	スタイフェル	ペニング
日本	709.603	4	15
台湾	467.534	18	10
ベルシア	326.842	6	7
スラット	92.592	9	4
マラバール	42.964	17	0
ウィングルラ	25.780	6	10
スマトラ西岸	93.280	15	3
ジャンビ	20.526	5	9
アチー	2.953	0	6
マカッサル	43.523	16	6

(1 グルデン = 12 スタイフェル、1 スタイフェル = 20 ペニング)

- a. 日本商館の利益は、4 位以下の商館の利益の合計の倍以上ある。
- b. 日本商館の利益は、台湾とベルシアの商館の利益の合計にほぼ匹敵する。
- c. 日本商館の利益は、スラットとマラバールの利益合計の 7 倍を越える。
- d. 日本商館の利益は、スマトラ西岸商館の利益の 10 倍には満たない。

25. ケンペルと今村源右衛門英生の交流の結果として資料が指摘しているのは次のどれか。
- a. 日本における宣教師の弾圧
 - b. 日本における西洋医学の発展
 - c. 日本におけるオランダ語水準の向上
 - d. 日本におけるラテン語の普及
26. 福沢諭吉が「政治上の喧嘩」と呼ぶものの説明として、もっとも適切な記述はどれか。
- a. 有産階級と労働者階級の権力闘争
 - b. 宗教的対立を背景とする血腥い政争
 - c. 王党派と議会派の対立
 - d. 政党間での競争と論争
27. 政党政治の説明として不適切なものはどれか。
- a. 政党政治は、選挙による政権交代を前提とする政治である。
 - b. 政党政治は、イギリスにおいて最初に発展した政治である。
 - c. 政党政治は、政権担当能力のある二大政党が行う政治である。
 - d. 政党政治は、政党が議会を通して政権を掌握する政治である。
28. 資料 8 頁の儒者の名前は次のどれか。
- a. 林羅山
 - b. 本居宣長
 - c. 荻生徂徠
 - d. 新井白石
29. 資料 9 頁下線部の著書の見解と最も近い文章はどれか。
- a. 人は社会に規定されるが同時に社会を動かす主体となりうる。
 - b. 人は知的活動によってのみ社会を動かす主体となりうる。
 - c. 転換期の社会では人は自由な主体でありうる。
 - d. 人の生き方を規定するのは社会である。

30. ケンペルが自らの文化を相対化しえた理由として、著者の見解と異なる説明はどれか。
- a. 宗派対立の激しさを経験して、ヨーロッパの文化に強い嫌悪を抱いていたから。
 - b. 広範な学問を修め広い教養をもつことで多角的に物事を判断できる視野を持っていたから。
 - c. 異なる文化をもつ人々と信頼に基づく個人的な関係を築き、継続的に知的対話を行うことができたから。
 - d. 書物が与える知識に依拠するだけではなく、未知の土地を旅し、自分の目で見ることを通して、ステレオタイプの他者理解を免れることができたから。
31. 資料で言及されている「啓蒙と呼ばれる新たな思潮」に関する以下の記述のなかで、資料での議論に合致しないのはどれか。
- a. 自己や社会が抱く偏見からの脱却を重視する。
 - b. 自分が属する文明を絶対視せずに相対化する。
 - c. 観察を通して得られる洞察を重んじる。
 - d. 無神論の立場から宗教を迷信として斥ける。
32. 資料から判断して次のどの記述が正しいか。
- a. ケンペルの『日本誌』は、ヨーロッパの中心的な啓蒙思想家らに読まれるほど、当時の日本像に大きな影響を与えた。
 - b. ケンペルの『廻国奇観』は、死後に出版された『日本誌』よりも影響力があった。
 - c. ケンペルの『日本誌』が評価されたのは、もっぱら日本においてであった。
 - d. ケンペルの『日本誌』なくしては、啓蒙思想は誕生しなかった。
33. 資料から判断して適切な記述はどれか。
- a. ケンペルは、日本に来る前に、すでに医学の博士号を修得した医師であった。
 - b. 17 世紀のヨーロッパの教育は、狭い職業教育に特化されない幅広い知識の基盤をもっていた。
 - c. ケンペルの博士論文は、法学的主題を対象としていた。
 - d. ケンペルが学んだ当時の医学は、自由学芸の 7 科目のひとつであった。

34. 資料から判断して適切な記述はどれか。

- a. スウェーデン国王派遣使節団の書記官としての経験は、オランダ東インド会社での上級外科医としての経験に比べると、意義において劣る。
- b. ケンペルがトルコ語を学んだのは、ストックホルムにおいてであった。
- c. ケンペルは、ペルシアでの任務ののち、オランダ東インド会社からの熱心な働きかけの結果、不承不承、ヨーロッパへの帰還を延期した。
- d. 10年に及ぶ旅の経験は、困難を伴ったが、ケンペルに比較と相対化の視点を与えた。

35. 資料から判断して適切な記述はどれか。

- a. ケンペルは、今村源右衛門英生が入手する資料のすべてを翻訳なしで読めたわけではない。
- b. 今村源右衛門英生がもたらす情報は、だれでも簡単に、かつ危険を犯すことなく入手できる類のものであった。
- c. ケンペルが自分とほぼ同じ年の今村源右衛門英生と親しくなることで、『日本誌』の執筆が可能となった。
- d. 軟禁状態に置かれたため、ケンペルの得た情報の多くが不十分なものであった。

36. 資料における著者の見解として適切な記述はどれか。

- a. 社会の転換期における混沌とした状況は、ケンペルの『日本誌』での不正確な記述に反映している。
- b. 現代社会にあふれる情報は、偏見や自己満足を生み出すので、できるだけ限定的な仕方ですべきである。
- c. 差異の認識は、生まれ育った文化を相対化する眼差しに直結する。
- d. 現代社会の情報に触れることは、必ずしも見慣れた風景の相対化に結びつく訳ではない。

37. 資料から判断して適切な記述はどれか。

- a. ケンペルは、『廻国奇観』の中で魔女狩りを批判した。
- b. ケンペルは、グダニスクで執筆した修了論文の中で魔女狩りを批判した。
- c. ケンペルは、グダニスクで医学を主題とした修士論文を執筆した。
- d. ケンペルは、『廻国奇観』をドイツ語で執筆した。

38. 資料から判断して適切な記述はどれか。

- a. ケンペルの時代のルーヴェン大学は、ルター派の学生を排除することで有名であった。
- b. ケンペルは、修士号をクラクフ大学で取得した。
- c. ケンペルは、医学の学位論文をケーニヒスベルク大学に提出した。
- d. ケンペルの博士論文は、のちに『日本誌』という表題で出版された。

39. 資料から判断して適切な記述はどれか。

- a. ケンペルは、スウェーデンがペルシアに送った使節団に加わったが、使節団での唯一の非スウェーデン人であった。
- b. スウェーデン国王からロシア皇帝への親書は、ドイツ語で書かれていた。
- c. ケンペルがスウェーデン王の使節団に加わった時のスウェーデン宮廷では、もっぱらラテン語が使用されていた。
- d. 『日本誌』は、ケンペルがペルシア滞在で得た知識に大きく依拠している。

40. 資料から判断して適切な記述はどれか。

- a. ケンペルは、ヨーロッパに帰還しても、二度とドイツの地を踏む事がなかった。
- b. ケンペルがヨーロッパに帰還した時、すでに故郷レムゴは魔女狩りの誤りを公に認めていた。
- c. 『廻国奇観』は、ケンペルの死後に出版された。
- d. ケンペルが遺した史料の多くは大英博物館にある。

参考文献

山内和『青い目に映った日本人―戦国・江戸期の日仏文化情報史』人文書院、1998年。

クレインス フレデリック『十七世紀のオランダ人が見た日本』臨川書店、2010年。

H. シュリーマン（石井和子訳）『シュリーマン旅行記 清国・日本』講談社、2011年（第38刷）。

本学では、入学試験問題（社会科学）作成にあたり「新版改訂・増補日本誌」を使用させていただきました。著作物使用許諾申請のため、今井正先生（編訳者）の著作権継承者を探しております。お心当たりの方は国際基督教大学アドミッションズ・センター（Tel.0422-33-3038）までご連絡いただきますようお願い申し上げます。